心あったかニュース

言霊と祭の祖国

日本の文化について、神話の時代から、受け継いでいるものがたしかにあるのだという内容のものが、ヤフーニュースにありましたので、ご紹介します。

なんと『日本神話』が再現されていた…日本人のほとんどが知らない、建設現場で行われる『地鎮祭』の真実　　現代ビジネス

より

本記事は松岡正剛『日本文化の核心』(講談社現代新書、2020年)から抜粋・編集したものです。

日本の立国のはじまりに『結び』と『立つ』とが重視されていたのです。最初の五神の名前はその象徴でした。このことを今日なおわかりやすくシンボライズしているのは『地鎮祭』でしょう。私たちはいまでも土木工事や建築工事をおこなう際には、必ずといっていいほど安全祈願のための地鎮祭をします。地鎮祭では、その土地の一角の四隅に四本の柱を立て、そこに注連縄を回して結界を張り、その中に緑ゆたかな榊の枝を掲げた白木の祭壇を設け、そこに向かって神職が祝詞を奏上することで工事中の無事を祈ります。まさに『結び』と『立つ』(建つ)とが交わっている儀式です。あの形と姿の中に、私は日本の『はじまり』にあたるものがささやかに再現されていると思います。ということは、いまも日本中でいつも日本神話の最初の光景が再現されているということです。地鎮祭ではその土地を『産土』とみなしています。地霊は産土にたくわえられているのです。だからこの産土も大切なジャパン・コンセプトです。産土は人が生まれた土地のことで、日本人は古来、その産土を産土神が守ってくれていると考えました。産土神とか産土様という。人々は生まれたその土地で名前をもつことになるので、産土神は『氏神』でもあります。産土神や氏神は人の姿をとっていません。土地の力とともにあるものです。そのため、ときにこれを慰撫したり励起させたりする必要がある。だから、私たちも神聖な土地に向かって気持ちを高ぶらせる必要がときどきあるはずなのです。この行為は『たまふり』(魂振り)ともいいますが、いまでは神主さんたちがこれを代行します。土地のムスビの力を奮い立たせるのです。それが祝詞の最初で語る呼びかけであり、また土地に向かって祈る姿なのです。私は、日本のことを考えるときに、いつも私たち日本人は『祖国』のことをどのように見てきたのだろうかということに思いを募らせます。祖国とは『母国』のことです。すなわちマザーカントリー。民俗学者の折口信夫は日本人の心の奥にあるマザーカントリーのことを『妣が国』とか『妣なる国』と呼びました。この『妣が国』は、民俗学ではしばしば『常世』と同定されてきました。常世は常にそこに待ってくれている産土の国』ということです。

編集後記

日本が、言霊の国だな～とすごく感じました。結ぶということが、今も大事にされていた。深くを知らなくても、結ぶという言霊、そして妣が国が常世、常にそこにまっていくれている産土の国という言霊がジーンと響いてくるものがありますね。